校門からの新校舎と玄関

ロビーからの玄関方向

ロビーに置かれた花が潤いを感じさせてくれました

待望の自然に優しい新校舎〈第二棟本館部分〉

新校舎完成

発行者
岐阜県立中津高等学校
同窓会

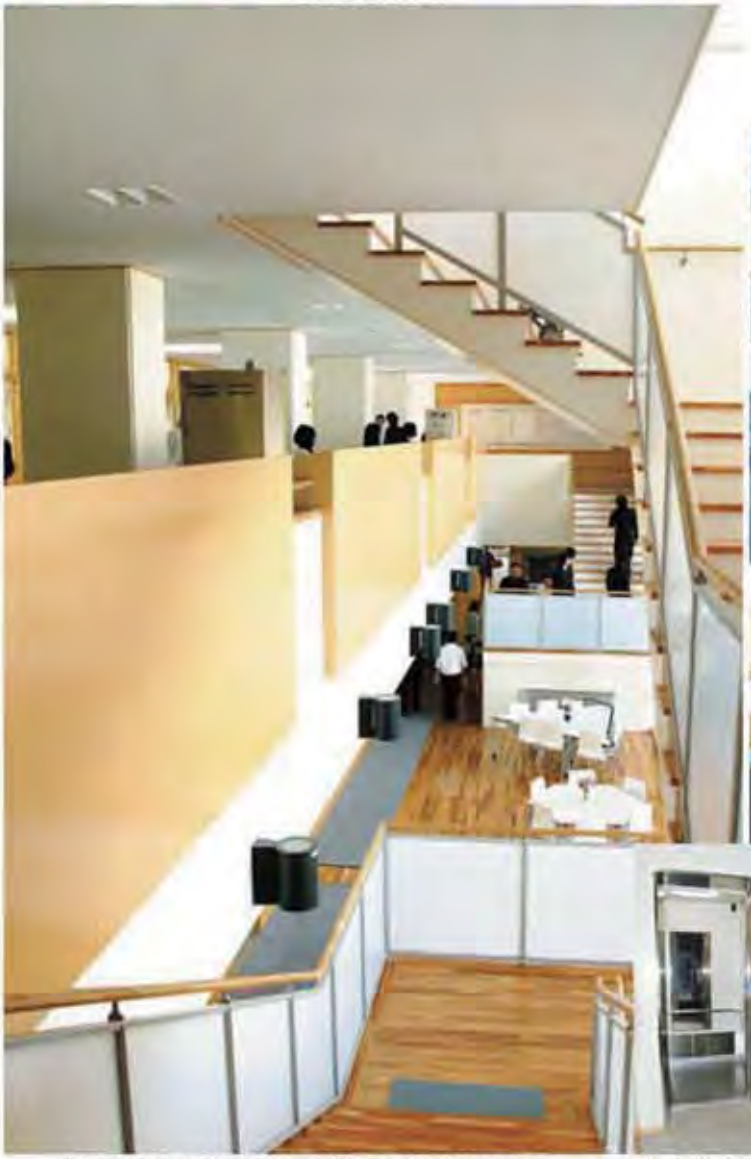
題字は野村一高学校長
タイトルバックは鈴木幸子
（東京都在住・18回生）

平成二十一年三月待望の新校舎が完成しました。今回完成したのは、第二棟本館部分です。校長室、職員室（全員制・定時制）、事務室、三年生八教室、コンピュータ室、ゼミ室、多目的室等が設置されています。エレベータも設置していただきました。一気に屋上まで上がるとそこは別天地です。将来は、全館バリアフリー化を目指しています。今回の新校舎の目玉は、なんと言っても職員室前の吹き抜け部分です。広い空間の中に、六角形の白いテーブルとモダンな椅子をセットしていただきました。一見、ホテルのラウンジの様相です。生徒同士や教師との語らいの場として、また、放課後の学習の場として活用しています。特に、試験期間中は夜遅くまで大賑わいです。

昨年九月に、第一棟に芸術教室が移され、第三棟解体工事も終了しました。いよいよ新第三棟の建設です。新第三棟は平成二十二年九月頃に完成予定です。その後、コンパスルーム改修と第一校舎の第二期改修及び外構工事が行われ、平成二十二年度中には全てが完成する見込みです。

中津高校　事務長　速水　広之

新校舎屋上には太陽光発電パネル、光取り入れタワーがあります
ロビーには現在の発電量が確認できるパネルがあります


吹き抜けのロビーは校舎の中心にあり、新校舎の大きな特色となっています

職員室は雑然としていて、時代が変わっても変わりません

エレベーターもあります

中津高を見学に見えた中学校のお母さん方

美術室、書道室などがあった第三棟跡地では新校舎建築中

新しい時代を超えて生き続ける 中高スピリットの創造を

中津高校同窓会会長　三尾　義彦（12回生）

県立中津高等学校の前身、町立中津高等女学校が明治三十九（一九〇六）年四月に誕生してから一〇四年の時が流れました。

世界経済も一〇〇年に一度と言われる経済危機の中で、全く新しい世界が始まろうとしています。

アメリカのオバマ大統領の提唱しているのが、グリーンニューディールと言われる新しい環境対策であります。日本の政治も自民・公明政権から民主党中心の政権に変わり、「CO2二〇二五年二十五%減」と国際公約しました。あらゆる経済戦略に地球温暖化対策が組み込まれることになってきました。いやおうなしに日本は変わらざるを得ないと思います。

一〇四年前に中津高等女学校が誕生してから、二十三年後の一九二九年秋から三十三年初めにかけて世界大恐慌が起こった。米国の株価は、三年間でピーク時の一〇・八%に、鉱工業生産もピーク時の四六・四%に落ち込んだ。二十九年に三・二%だった失業率も三十三年には二十四・九%になり各国は経済のブロック化に走り、世界貿易も激減した。この影響は中津高校の生みの親でもある、問家にも大きな影響を与えた。問家は、徳川時代は尾張藩の御用商人として活躍され、木曽の木製品「白木物」である櫛笠や、塩の販売を行い、財をなした。後には苗木藩の御用商人になり、塩、大豆、味噌、溜まり、油、砂糖などの食品、その他衣料他、あらゆる日用品を取り扱い、金貸業も行なっていた。

その後、問屋の株を分家に譲って新しく質屋を始め、金融業に重点を移していった。金融業で成功していたが、明治維新前後より横浜の自由貿易が出来る様になり、生糸貿易が始まった。勝野製糸が誕生して明治四十一年には、一〇二二釜、男女一〇〇〇名近い大工場になっている。ここにも問銀行の融資がなされていた。幕末から明治にかけてこの中津にも様々な事件があったが問家も上手に立ちまわり多額の利益を得ていた。明治十五年には店卸残高は九万円（九万両）になっていた。（一両一円となり、現在なら一八〇億円位）

明治二十年については、問家の年間所得は六〇〇〇円、うち貸金利子三六〇〇円、小作米所得二二〇〇円だった。つまり問家は所得金の六割が利子で金融業が主体の商人地主であった。

明治三十九年三月には、資本金五十万円の問銀行が開業した。明治四十年の岐阜県多額納税者名簿によると問家は県で二番目の高額納税者で五一三三円となっている。

明治三十五年に待望の中央線が開通したので「かの有名な渋沢栄一」と協同して明治三十九年十二月に中央製紙を創業し、ただちに工場建設がはじまり、中津川駅から尾鳩まで軽便鉄道が敷設され四十一年五月に正式に営業が開始された。

中央製紙も第一次世界大戦中（一九一四～一九一八）紙価格が高騰して大変利益をあげ、問家もこのブーム期には中央製紙の配当金だけでも毎年六万円以上を受け取っている。

大正二年に中央製紙の専務であった大川平三郎（渋沢栄一の甥）が、内地では原料パルプが不足するとみて、樺太のパルプ資源に目をつけ「樺太工業」というパルプ製造会社を設立した。大正十五（一九二六）年に中央製紙と合併した。しかし昭和二（一九二七）年の金融恐慌、そして史上最大の昭和恐慌と相次ぐ不況に襲われ、樺太工業の財務破綻が表面化して王子製紙に吸収され、問家もそのあおりを受けた。

問家は徳川時代より明治・大正と大きな時代の変化の中で、御用商人から質屋の金融業・銀行・製紙工場の経営など時代に敏感に対応して成長してきたが、さすがに世界大恐慌には太刀打ちできず一時の勢力を失った。当時は岐阜市と大垣市にしか高等女学校がなく、地域の女子の進学の為に「中津町立高等女学校」を寄付され、問銀行が現在の十六銀行と合併し、工業面でも現在の王子製紙や弟さんの問四郎氏の努力により現在の三菱電機中津川工場の融致など、語り尽くせないほど現在の中津川市にとって大きな貢献をされている。

さて、一〇〇周年の式典を終えてから早や五年が経ち、旭陵留学生プログラムも最終年を迎え、現在最後の留学生六名がアメリカ・カナダ・イギリスにて勉学しております。合計三〇名の生徒が留学しました。

恵那北高校との学校統合、単位制普通科高等学校への移行、そして平成二十三年（二〇一一年）には新校舎の完成、更には硬式野球部の発足（三年目）と中津高校は大きく変化しています。

この様に大きな時代の変化は一〇〇周年を契機とした「第二の建学」として考えるべきではないでしょうか。旭陵留学制度を中心としょうが、本校の一つの歩みとして、大学卒業後の地域での就職方法を模索せねばと思っています。

ただこの課題は決して一朝一夕にできるものではありませんし、高等学校レベルで簡単に解決するものでもありません。同窓会先輩諸氏のご理解とご指導をよろしくお願いいたします。

「中津高校第二世紀」の幕開けにあたって忘れてはならないものは、先人たちの大いなる遺産です。創立以来、中津高校の歩んできた道は決して平坦なものではありませんでした。中津高校には、常に高い志を持つ学生や先生の姿がありました。

「郷土の繁栄」「自由と個人の尊厳」そして「新しい世の柱」を建学の理念とし、有為の人材養成を使命に、常に勉学の探求を深め、時代の流れに先んじ発展して参りました。

これからはその精神を継承しつつ、個人としての生きる知恵と実力、そして先見力を必要としている世の中であります。地域社会はもとより、グローバルな視点で活躍できる文武両道をモットーにした学校として生き続けなければならないと思います。

私たち同窓生は、中津高校人として、母校が時代にマッチしている学校として、地域社会の発展の為になる学校として、益々成長していく様に心から応援していきたいと思います。

地球人たれ

校長　野村　一高

四月から歴史と伝統ある中津高等学校でお世話になっています。私は学生生活を岐阜で四年、札幌で五年送り、その後、帯広で高校教員になり、岐阜県へ戻ってから初任が郡上高等学校、教頭で高山高等学校、校長として中津高等学校に赴任しました。この間、平成五年にマレーシアのマラヤ大学に講師として派遣され、日本の国立大学医学部へ留学する学生を指導しました。また私事ですが、前後して従兄弟がブラジル、義兄がタイ、義甥がインドネシア、甥がドイツへと、企業や学校関係から派遣されました。私はマレーシアから帰国後、諸外国を訪問し、世界の中での日本の位置付けを深く考えました。そして日本人が世界の大きさを理解し、地球的規模で物事を考えることがいかに大切であるかを痛感しました。また同時に帯広、郡上八幡、高山など地域の拠点都市で勤務し、これらの都市では街の活性化と人口流出が大きな問題であると認識してきました。

中津高等学校へ赴任し、入学式と始業式で「地球の大きさの分かる地球人であれ」と話しました。折しも入学式で三尾同窓会が発足されたのが「グローカル」という言葉で、グローバルに考え、ローカルに行動するという和製英語の概念は私の考えと全く同じでした。そして中津高等学校の創立百周年記念「旭陵留学制度」の創設・実行に感心し、中津高等学校同窓会の先見性を大変嬉しく思いました。

話は変わりますが、平成二十一年五月全国高等学校長協会研究協議会において、「明日の日本を背負う人材育成を目指して」というテーマで、高等学校長協会と経済同友会の間でシンポジウムが行われました。世界経済がグローバル化してゆく中で、日本が競争力を維持しさらに発展していくための戦略として、人材育成を考えなければならないと言う経済界の強い思いが発端でした。インド、中国、韓国などの若者はエネルギッシュでハングリーであり、またヨーロッパやアメリカの若者は国際感覚を持った伝統的教育を受けています。現在の日本の高等学校教育では、世界経済のグローバル化の中で世界に太刀打ちできなくなると経済界は危惧しているのです。

しかし中津高等学校同窓会は今から何年も前に、母校の生徒を如何にグローバリゼーションに適応させるか議論を重ねてきました。私はこの未来を的確に捉えた中津高等学校に赴任できたこと、そして同窓会の皆さんと同じ思いで生徒を指導できることを何よりも幸せに感じています。今後とも世界に目を向けるとともに、地域に貢献できる中津高校生を育てたいと思っています。

また現在、中津高等学校の卒業生は九十九%が大学等へ進学していきますが、過去の卒業生がどの程度中津川へ戻っているかは掌握できていません。例えば中津高等学校出身の高校教員は岐阜県全体をみても決して多くはないと思います。生徒たちが中津高等学校で自分の好きな学問を模索し、希望する大学に進学し、自分なりの職業を見出すことは大切なことです。しかし中津高等学校が今後とも地域に根差した教育活動を続けるためには、中津高等学校出身の大学卒業生が自宅から通える場所で職を得ることも重要だと思います。かつて中津高等学校の一学年定員は四百名以上でしたが、今はわずかに二百名しかありません。二百名の卒業生のどれだけを中津川に戻せるかは大きな課題であり、

ウエイトリフティングの活躍
全国に挑み国体で四位

平成二十一年八月九日十日、奈良県橿原市において第五十六回全国高等学校ウエイトリフティング競技選手権が開催され、本校からは二年生の伊藤大永君と深谷崇史君の二名が出場しました。二人とも日頃の成果を発揮し、深谷君は五十三kg級で二十位、伊藤君は六十九kg級で十五位と健闘しました。

顧問である中田高広先生は、「本人たちの努力が実り、良い結果が出たと思う。記録にも満足している。来年はさらに上を目指しベストを尽くして欲しい」と健闘をたたえました。また、練習の成果が実り、平成二十一年度の新潟国体では、伊藤大永君が、六十九kg級で四位という輝かしい成績を残しました。伊藤君は、「来年度さらに上位を狙いたい」と、決意を新たにしていました。

ところで、顧問である中田先生は、今年三月で定年退職を迎えられます。中津高校にウェイトリフティング部を創設し、インターハイ・国体出場など数々の実績を残された先生の功績には改めて敬意を表します。

先生は、中津高校での勤務を振り返りながら、「二度の転勤で、計二十四年間中津高校に勤めさせていただいた。創部当初から心配だったのは、いかに部員数を増やすかで、部活動への勧誘が大変だった。ただ、入部した生徒は、どの生徒も練習に対して前向きで、熱心に取り組んでくれたので、指導する側も情熱を傾けることができた」と満足そうでした。

退職を前に、「普段の練習を見る限り、各選手は予選通過までは順当に勝ち進むことができる。あとは、大事なところでアッと驚く底知れぬ力を出すことだ。中津高校の生徒なら、それができるはず」と熱い思いを語られました。中田先生の有終の美が近い。

林　尚志（29回生）

中津高校定時制

中津高校定時制同窓会会長　佐藤　和男（定15回生）

中津高校定時制は、昭和二十三（一九四八）年六月に開校、以来六十年の歴史を築いて来た。平成二十二年四月、これを祝い創立六十周年のささやかな記念式典が挙行された。

中津高校定時制の卒業生は、本校千四百余名、四分校（三隅・付知・苗木・加子母）千八百名弱、合計三千二百余名を数える。昭和二十年代後半、中津高校定時制は県下最大規模を誇った。昭和二十年の卒業生だけでも本校・分校あわせて百四十名、卒業証書を手にすることのできなかった友を含めれば、当時の全在校生は相当な数であった。

その後、昭和四十年代に四分校が続々と閉校となり、一部の生徒は「恵那北高校」に編入学となった。終戦直後の混乱から高度成長期へと我が国が経済発展する過程で、定時制高校もその役割と存在価値を変えてきたと言える。

一方、生徒数は激減したけれども、今も昔も生徒の向学心と仲間を求める気持ちは変わっていない。定時制高校が存在することの価値はますます高まっている。

定時制同窓会は、昭和三十二（一九五七）年に設立され、平成二十二年には五十三周年を迎える。近年では平成七年から同十九年まで、同窓会をリードされた和田金夫前会長の業績が光る。平成二十年七月、羽島市での県定通教育六十周年式典の席上、永年の業績に対し表彰を受けられた。

定時制同窓会の最近のトピックスは！

○会計と会計監査二名の、女性三名が役員に就任していること

○総会と本校・分校交流会を継続していること

○授業参観を新事業として取り上げたこと

○全国定通陸上競技大会出場選手への激励

○バトミントン部への同窓生による指導実現

などである。

学校の先生方の情熱と指導、在校生の夢と希望、父兄の愛情と信頼、地域の方々の理解と関心、同窓生の参加と協力によって、これからも中津高校定時制七十周年へ向け、新しい歴史を同窓会としても一歩一歩築いて行きたい。

中津高校の現在（いま）

教頭　岩本隆明（22回生）

二〇〇年の歴史と伝統を引き継ぐ新しい進学校」。これは、岐阜県教育委員会が発行する中学生のための進路情報誌「岐阜県高校ガイドブック2010」に掲載した中津高校のキャッチフレーズです。

中津高校は、恵那北高校との統合、単位制への移行、校舎の改築と大きな山を乗り越え、地域の教育を担うべき新しい高等学校として生まれ変わりました。そこで、幾つかの特色ある教育活動並びに近況を述べてみたいと思います。

旭陵学問探究プログラムの推進
～進学を重視した単位制教育課程の導入～

新中津高校では、単位制を有効に活用し少人数授業や一人一人の進路希望を実現するための多様な選択科目を配備した教育課程を用意しました。週二回の七限授業を実施しています。一年次では共通科目を履修、二年次から文系理系に分かれます。三年次には、自分の進路希望や興味・関心・学力等にあった科目を選択することができます。学校設定科目といって、本校独自の科目「英語研究」「数学特講」「理工系の数学」「体育特講」といった科目も用意しています。

また、芸術系進学の生徒のための科目「素描」「彫塑」といった科目もあり、数名の生徒に対してもこれらの授業を開講しています。さらに、新校舎には普通教室の半分の大きさの「ゼミ室」ができ、少人数授業などで大活躍しています。平成二十二年九月には、全ての教室が完成予定。さらに充実した教育が展開できるものと期待しています。

また、中京学院大学との高大連携授業として実施している中京学院大学の講師による「世界経済と中津川の歴史」「中国語特講」「英会話特講」についても六年目を迎え、特色ある授業として軌道に乗ってきています。

旭陵特進プログラムの推進
～特進クラスの設置～

今までの、自然科学コースや英語コースに代わり、難関国公立大学や医学部等への進学を目指す特進クラスを設けています。各年次に二クラスずつ設置しています。今までのコースと異なるところは、クラス替えがあること。メンバーも各年次毎に入れ替えがあります。一年次では、共通科目を履修します。文理の色分けがありません。二年次生から文理に分かれます。一年間じっくり自分の将来を考えてから文理を選択できるようになったため、途中で希望が変わり、理系から文系へ変更するといった生徒が激減しました。

学校全体に対しても特進クラスの存在が良い影響を与え、英語の成績が顕著ですが学力は大きく伸びています。

このことだけではありませんが、学校全体も落ち着いた雰囲気の中で学習できる環境があります。この数年国公立大学への合格者数も伸び続け、今年度三月での合格者数は六十名に達しました。

また、この十二月には三年次生の実用英語検定の二級合格者が一〇〇名を超すといった快挙も成し遂げています。

本校の英検（実用技能英語検定）合格者合計（平成21年11月）

	在籍者数	準二級	二級
1年生	200	12	1
2年生	241	56	10
3年生	232	199	100
合計	673	267	111

過去5年間の主な大学合格状況

	H18	H19	H20	H21
国公立大学	44	46	55	60
私立大学	309	254	202	225
公立短期大学	5	5	3	1
私立短期大学	25	26	13	8
看護医療福祉専門学校	36	32	27	18

旭陵進路プログラムの推進
～進路学習の充実～

特に、進路指導は、かねてから中津高校の教育の根幹をなすものでしたが、単位制移行と共に、より機能的で効果的な教育システムを構築しました。LHR、総合的な学習の時間、教科「情報」を積極的に活用し、進路ガイダンスや外部講師による講義、本校卒業の大学生による進路の学習、コンピュータによる情報収集などの授業を充実させています。特に、今年で実施二年目となりますが、一年次では、自分の将来を考えて、夏休みに裁判所や大学などの学問探究、芸術や自然探索などを目的とし校外学習に出かけます。生徒には大変評判の良い研修の一つです。

また、先日は「先輩に聞く」ということで、卒業生の方の中で弁護士、医師、会社経営者、工業技術者、薬剤師、保育士などの方々に来校していただき、仕事を通しての生き甲斐や「高校時代の思い出」などたくさんのお話をして頂きました。生徒にとっては、将来を考えるための大変良い機会となったようで、諸先輩方のお話に熱心に聞き入っておりました。

先輩の体験談を熱心に聞く

学校生活の充実
～旭陵祭と部活動～

今年度からは、旭陵祭を六月に実施することになりました。旭陵祭は本校の伝統の行事です。梅雨の時期であること、早期実施のための準備期間の不足といった不安材料もありましたが、三年次生は演劇、二年次生は演示、一年次生は展示と生徒たちはそれを見事乗り越え、例年に勝るとも劣らない学校祭を展開することができました。

旭陵祭　東軍の応援

続いて、部活動の様子ですが、中津高校は文武両道の教育を推進する方向は変わりません。運動系では、ウエイトリフティング部の全国的な活躍をはじめ、硬式化二年目の野球部の戦績は常に職員室の話題となっています。水泳部は実力もつけてきており、毎年、東海大会出場を果たしています。県大会での上位入賞が期待される硬式テニス部や地区で優勝旗をいただいたハンドボール部など地道な活動を続けています。

文化系では、吹奏楽部が今年度は第四十回記念定期演奏会を開催いたしました。さらに、恵那北高校から引き継ぐギターマンドリン部も徐々に力をつけ東海大会出場を果たしています。美術部は個人ですが県の美術展で賞に入選するなどの実績も残しています。それぞれの部の活性化のためにも引き続きOBの皆様方のご指導ご鞭撻をお願いいたします。

文化祭　2年C組「馬鹿野明太鼓」

定時制　陸上部活動記録

力走する古田陽香さん

「陸上がやりたい」古田陽香さんのそんな一言で、陸上部は発足しました。たった一人の部員ですが、放課後の短い時間を利用して、毎日元気よく活動しています。

昨年度は、六月の県大会で三〇〇〇mに出場し全国大会への切符を手にしました。しかし初めての全国大会は予選敗退。それでも、国立競技場で走れたことは、とても良い経験になりました。しかし、古田さんの中では良い思い出ばかりではなかったようで、学校誌によせた作文の中で、「本番は思うように走れなかったけど、すごく楽しかったです。だけど、もっと速くなりたいと思いました。少しだけ悔しかったです。」と語っています。そして、「全国大会の決勝に出場する」という、次の目標を見つけたようでした。

今年度は、少しでも速く走れるように、たくさんの距離を走りました。県大会では、全国大会への出場権は得たものの、思ったような走りができませんでした。そのため、全国大会へ向けての練習にも自然と力が入り、本番のスタート時刻に合わせ、十五時前後に練習をしたり、競技場まで練習に行ったりもしました。

大会一日目の八月十四日に女子三〇〇〇mの予選が行われました。気候も涼しく、体調も良い状態でスタートを迎えることができました。しかし、集団の中でクラッシュにあい、転倒してしまいました。そんな中でも、最後まで諦めることなく、力強い走りを見せてくれました。ゴールしたあと、走りに納得がいかなかったのか、悔し涙を流していました。それでも、自己ベストタイムを十八秒も更新する素晴らしいレースでした。

今年も決勝へは進めませんでしたが、努力すれば結果は自然とついてくるものだということを学びました。そして、決勝に出場するという目標を達成するためにも、練習に励んでもらいたいです。

陸上部顧問　牧野　襄者（56回生）

中津高等学校硬式野球部 後援会の発足及び活動状況

後援会会長　加藤良一（24回生）

平成二十年四月の同窓会役員会において三尾義彦会長の「後援会を発足しよう」と言う提案によって準備を行い、九月に発足、旭陵会ゴルフ大会、各支部同窓会総会に出席し、後援会入会のお願いを行ってまいりました。

同時に、中津川市内の企業及び同窓生にもお願いして、年会費を集めさせて頂きました。そして、今年六月十四日第一回の総会を開催し、本格的に後援会活動を始動しました。

昨年秋よりの新チームの成績は、公式戦では一勝も出来ませんでしたが、練習試合では、十数勝しています。夏の選手権大会では、惜敗しましたが、春季リーグ戦とは見違える程の戦いぶりでした。硬式の練習試合が出来ないグランドなので他高校、球場での試合が多く、現在は三尾同窓会長の会社のマイクロバスを年四、五十回無償でお借りしていますが、近い将来には、後援会で支援したいと思います。今年度は、新入部員十九名と多く、新チームで公式戦一勝を目指してがんばって練習に励んでおります。

そんな生徒たちに後援会として十分な支援が出来る様活動を行っています。つきましては、何かと大変な時節柄ですが、将来性のある中津高等学校硬式野球部のために同窓生の皆様方のご理解、ご協力を賜りましてご入会を宜しくお願い申し上げます。

年会費
個人一口　三千円
法人一口　一万円

OB吹奏楽団熱演

中津高校吹奏楽部の第四十回記念定期演奏会が五月五日中津川文化会館で開かれ、OB約六十人による卒業生吹奏楽団が特別演奏を披露しました。

これは、四十回記念の企画の一つ。一年前にさかのぼりますが、当時顧問の横幕先生をはじめ吹奏楽部の何か思い出に残る企画をということで、取り組んだものです。平成二十年三月発行の「旭陵」でも、記事として取り上げて頂きましたが、三月からの参加OBの募集、そして八月の初練習から合計八回の練習を重ね、当日は、十八歳から六十三歳までの参加OB諸氏が「ワシントンポスト」「交響詩フィンランディア」「ディズニー映画セレクション」の三曲を披露しました。指揮は安江忠城先生と横幕功充先生。何十年ぶりに楽器を持ったという人もありましたが、メンバーの心が一つになって超満員のお客様の大きな拍手にこたえるだけの演奏ができたと思っています。

なお、このOB楽団の結成と同時に、しばし休眠状態だったOB会も組織することができ、初代OB会長、林健一氏（17回生）のもと、第一回OB会総会をこの演奏会当日開催することができました。現役やOB相互の交流や中津高校吹奏楽部支援を目的としています。

去る十一月七日の市民音楽祭では、「旭が丘吹奏楽団」（代表小林浩氏30回生）を立ち上げ、さらに、毎年継続して活動していくことを確認しています。

岩本　隆明（25回生）

※会費納入について

吹奏楽部OB会では、現役支援のための資金援助をお願いしています。詳しくはホームページをご覧下さい。

HPアドレス
http://nakatsuko-brass.net

硬式野球部後援会より

硬式野球部「マイクロバス贈呈式」

平成二十一年十二月二十六日（土）、中津高校体育館横駐車場にて、硬式野球部後援会よりマイクロバスが野球部に贈呈されました。

一・二年生合わせて野球部員は、現在二十八名（他マネージャー四名）います。年間を通して、公式試合が十五試合、練習試合の遠征が四十日程あります。移動には必ずバスの利用が必要になります。

また、球場練習にも移動が必要です。今回のマイクロバスの贈呈で部員全員が一度に軽快に動けることになり、大変喜んでいます。このバスを十分に活用し、良い結果を残せるよう努力していきたいと思います。

野球部監督　青山　翔

定時制バトミントン部

シャトルが運ぶ

先生方と定時制同窓会役員との懇親会は、意見交換に最適の場である。

平成二十年には、たった二人の生徒と先生が始めたバトミントンの話に同窓会役員一同は感激。生徒を励ますと、西尾副会長が（定22回生）三洋電機岐阜へ走り、ミニバンで運んできたものがあった。オグシオである。その等身大のパネルは輝いて見えた。早速、職員室へ持ち込んだ。歓声があがった。

平成二十一年には、シャトルが欲しいという話。バトミントンを少しでもやったことのある人にはわかることだが、シャトルが一部でも欠けると、そのスピードが変化する。丸坊主になったようなシャトルは、練習にも使えない。せめて、試合前の練習にはいいシャトルを使わせたい。先生方のその気持ちに、同窓会役員一同はまた感激。生徒を喜ばせようと、また西尾副会長が、勤務先のバトミントン部に働きかけ、運んできたものがあった。シャトルの山である。少しは傷んでいるが、練習には十分使える。

もうひとつ運んできたものがあった。それは、三菱バトミントン部の選手であった永井卓郎さん（定昔10回生）の「指導してもいい」という話だった。永井さんは本気だ。定時制の放課後、夜八時半過ぎから、コーチとして旭ケ丘の坂を登る。

定時制バトミントン部は、八名に増えた。

県大会での活躍を、先生もコーチも、同窓会も期待している。

佐藤　和男（定15回生）

伊藤育雄さん（定昔1回生） 外務大臣表彰

平成二十年四月、定時制卒業第一回生の伊藤育雄さんが、外務大臣表彰を受賞されました。日本ブラジル交流年・日本人ブラジル移住一〇〇周年にあたり、伊藤さんの豊橋市を中心とする外国人（ブラジル人）支援ボランティアの永年にわたる功績が評価されたものです。なお、伊藤さんは記念誌「旭陵百年」にご自分の活動を「多文化共生の町づくり」として寄稿してみえます。

佐藤　和男（定15回生）

日下部光穂先生 脚本集出版のお知らせ

演劇部の顧問として長年にわたって私たちの脚本を執筆してくださった日下部先生が還暦を迎えられたのを機に、日下部先生（18回生）の素晴らしい脚本をぜひ本にしたいという私たち演劇部卒業生の思いから、脚本集を編纂することになりました。

頒価は二五〇〇円、平成二十二年五月頃の出版を予定しています。お問い合わせは・・・

弟川　貴也（48回生）
電話090-9614-8488
熊谷　志保
電話090-9933-5774
中津高校0573（66）1361
旧顧問　岩本　隆明
熊谷　志保（53回生）

スナップ

平成二十年十月、中津川市美合の「茶房かわらや」で、関西旭陵会会長・加藤紘さん（10回生）のスケッチ展がありました。会場で前同窓会長の吉川光彦さん（8回生）と加藤さんのスナップです！

卒業生 現旧職員 文庫紹介

■「柳絮」第七十四号　柳絮社
丹羽さだ（女28回生）
■「槍の山」　原　幹子（女37回生）　旺歌新聞社
■「歌集　守山」　旺歌新聞社
日比野洋子（女37回生）
■「アメリカの旅の文学」　昭和堂
亀井俊介（2回生）
■「フォトニクス」　オーム社
末松安晴（2回生）
■「檜ごころ」　アズマ
平野和男（2回生）
■「ラベル・製品安全データシート作成実務必携」　化学工業日報社
佐野　弘（9回生）
■「アートなガラスの材料学」　里文出版
加藤紘二（10回生）
■「人生探査機からの報告」　文藝社
西尾貞幸（12回生）
■「センサーの影　大島史洋歌集」　ながらみ書房
大島史洋（14回生）
■「棄民の群れ」　梶田幸一（18回生）
■「偶然性の時間論」　岩波書店
（平成　2009年3月号）
■「父と子の思想」　筑摩書房
■「豪華な国、豪華な暴力」　現文社
小林敏明（18回生）
■「やりたい仕事で幸せになる！」　あさ出版
加藤博子（31回生）
■「時間と学費を無駄にしない大学選び」　光文社
■「大学進学・就活進路図鑑　2010」　光文社
山内太地（47回生）
■「青の季節　光と影」　文藝社
磯村昭和（現職員）
■「川柳に親しむ」（09年版ベストエッセイ集一光ぬのに良い日だ）　文芸社秋社
加藤雅美（旧職員）
■「手記　ありがとう」　自費出版
吉村生夫（現職員）

（順不動）

情報をお寄せください。

中津高校創立一〇〇周年記念事業

「第I期旭陵留学生プログラム」を終えて

創立一〇〇周年事業の一環として、諸先輩方の母校に対する、ひいては後輩に対する熱い思いを具現化した「海外留学奨学金制度（通称「旭陵留学生プログラム」）も当初の計画の五年目の選考を終了しました。第I期留学生六名は、八月末までに各自の派遣国に元気に旅立ちました。それぞれの年度の選考は四月から開始され、保護者同伴面接試験、留学のためのSLHP試験、十二月に実施される『旭陵留学生認定証授与式』を経て、翌年の七～八月にかけて「旭陵留学生激励会」による激励を受けて後、六名の生徒達はそれぞれの派遣国へと向かいます。

こうした中、六～七月にかけて前年度の留学生達が順次帰国し、『旭陵留学生報告会』後、中津高校での新たな学生生活を開始することになります。七月には帰国生の為に「旭陵留学生帰国報告会」を開催しパワーポイントを使用して、留学生各自の派遣国での一年間の生活を報告して貰います。このように年間を通じて、同窓会理事、留学斡旋業者、当該保護者と懇談を密にしながら、五年間に渡りこの留学制度に携わってきました。

この留学制度に携わる中で常に念頭に置いていることが一つあります。それは、留学前の『基礎英語力の養成』です。多くの同窓生の母校への想いのこもった寄附金で賄われるこの制度をより実りあるものにするためには、派遣国で本人の英語力が目覚ましく向上できることです。そのために、可能な限りの基礎的英語力の養成を留学前にしておかなくてはなりません。何故なら、素晴らしい英語力は、しっかりとした基礎英語力が礎としてないと達成できないからです。このことを一点に心掛け、何冊も英語の教材を課題として渡し、指導に当たってきました。

幸いにも、帰国留学生は、それぞれのクラスでとても素晴らしい動きを見せてくれ、中津高校全体の活性化に大いに貢献してくれ、進学先においても素晴らしい結果を出してくれています。以下に卒業した留学生の進学先を列挙します。

〈旭陵留学生の進路先〉

・伊藤洋子　北九州市立大学外国語学部国際関係学科
・北原美月　同志社大学文学部英文学科
・原　亜弥奈　千葉大学文学部行動科学科
・古谷知美　静岡県立大学国際関係学部国際言語学科
・堀　友紀　北九州市立大学外国語学部国際関係学科
・渡邊絵子　名古屋外国語大学外国語学部英米語学科

〈第2期生〉

・西尾慶太　東京大学文科三類
・西尾貴仁　早稲田大学商学部
・塚本友里江　立命館大学産業社会学部現代社会学科
・遠藤英成　愛知県立大学外国語学部中国東南アジア学科
・小栗美彩紀　千葉大学文学部国際言語学科
・杉　朝未　茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科

〈第3期生〉

・安田えり　中京大学国際教養学部国際教養学科
・浅野友歌　名古屋大学工学部物理工学科
・所　佑花　富山大学人文学部人文学科
・林　紗希　静岡大学教育学部幼児教育学科
・山路悠加　お茶の水大学文教育学部言語文化学科

尚、今後は「第II期旭陵留学生プログラム」として年間二名の生徒を前プログラム同様に創立一一〇周年に当たる平成二十七年度を目処に派遣を続けます。

旭陵留学生プログラム担当　宮下　晴夫（30回生）

第1回！　平成17年度留学生氏名、出身中学、派遣国
堀　友紀（上矢作中）　派遣国：イギリス（年間）
渡邊　絵子（坂本中）　派遣国：アメリカ（年間）
伊藤　洋子（恵那東中）　派遣国：カナダ　（年間）
北原　美月（付知中）　派遣国：アメリカ（年間）
原　亜弥奈（福岡中）　派遣国：アメリカ（年間）
古谷　知美（宮下中）　派遣国：アメリカ（年間）

第2回↑
平成18年度留学生氏名、出身中学、派遣国
遠藤　英成（第二中）　派遣国：アメリカ（年間）
小栗美彩紀（坂下中）　派遣国：アメリカ（年間）
杉　朝未（恵那東中）　派遣国：イギリス（年間）
西尾　慶太（福岡中）　派遣国：アメリカ（年間）
西尾　貴仁（福岡中）　派遣国：アメリカ（年間）
塚本友里江（岩邑中）　派遣国：イギリス（年間）

←第3回
平成19年度留学生氏名、出身中学、派遣国
高橋　愛華（坂下中）　派遣国：アメリカ（年間）
安田　えり（恵那東中）　派遣国：イギリス（年間）
浅野　友歌（第二中）　派遣国：アメリカ（年間）
所　佑花（付知中）　派遣国：アメリカ（年間）
林　紗希（阿木中）　派遣国：アメリカ（年間）
山路　悠加（飯田中）　派遣国：オーストラリア（年間）

第4回→
平成20年度留学生氏名、出身中学、派遣国
大竹　紗季（第二中）　派遣国：イギリス（年間）
鈴木　佐季（坂本中）　派遣国：イギリス（年間）
勝久　美子（坂本中）　派遣国：アメリカ（年間）
吉田　覚度（第二中）　派遣国：アメリカ（年間）
塚本　啓介（岩邑中）　派遣国：カナダ　（年間）
志水　悠麻（第一中）　派遣国：カナダ　（年間）

←第5回
平成21年度留学生氏名、出身中学、派遣国
宮玉　早織（第一中）　派遣国：アメリカ（年間）
宮田　結大（第二中）　派遣国：カナダ　（年間）
近藤日香里（恵那北中）　派遣国：カナダ　（年間）
西尾　真穂（苗木中）　派遣国：アメリカ（年間）
山本新之助（苗木中）　派遣国：アメリカ（年間）
青木橋奈美（第二中）　派遣国：カナダ　（年間）

第6回→
平成22年度留学生氏名、出身中学、派遣国
三宅栄里花（岩邑中）　派遣国：アメリカ（年間）
原　愛美（瑞浪中）　派遣国：カナダ　（年間）

シリーズ　青年海外協力隊に参加して

大山　勝巳（45回生）

興味深い歴史や文化、経済発展や技術の進歩等、私が何気に暮らしてきた日本は世界に誇れる国のひとつなのだと改めて実感させられた。その きっかけとなったのは二〇〇五年七月から参加した青年海外協力隊である。派遣されたのは東欧ルーマニア。日本人にとって名前は知っていても馴染みのない国かもしれない。そのような国で体育教育に携わり、日本文化を紹介する役割を担いつつ、二年間を過ごした。

ルーマニアの素晴らしさは豊かな自然と心の温かい人々にある。世界自然遺産であるドナウ・デルタには二二〇〇種類の植物が育ち、三〇〇〇種類の鳥類が生息する。夏に見られるペリカンの大群には感動を与えてもらえる。人々はとても陽気で、家族や友達とその豊かな自然を相手に活動するのが大好きであり、日本人とは違いのんびりしている

のが良いところでうらやましくも感じる。しかし、その一方では課題も多い。特にストリート・チルドレンの存在が印象的であった。幼い子供が決してきれいではない服を纏い、道端や駅の周辺、食品売り場近くでものの乞いをする姿は日本では決して見られない。

海外で生活をしてみて、日本を外から見る目を養ったことは貴重な財産となった。この経験があったからこそ、日本の良さを改めて知ることができたのである。私たちが培ってきたその良さや知識、技術を世界の人々に役立てる。これからはそのような役割を果たしていくことも日本人にとって大切なのではないかと感じている。

シリーズ　交換留学を通して学んだこと

旭陵留学第一期生　千葉大学文学部行動科学科　原　亜弥奈（57回生）

高校時代の留学経験は私に大きな自信を与え、また自分の世界観を大きく変えました。「もっといろんな人に出会いたい。いろんな人の意見を聞きたい。いろんな国を見てみたい。自分の世界観をもっと広げたい。」と、思うようになりました。この思いは大学生の今でも変わりません。

大学では、英語力を生かして、一年生から上級の英語クラスに挑戦をしたり、留学生向けの授業を受講したり、留学生のチューターを経験したりしました。そのため、日本人の友達だけではなく、様々な国の人たちと友達になることができました。

また、留学から得た「いろいろな世界を見たい」という好奇心から、長期休暇を利用して様々な国に旅行をしてきました。今までに、イギリス、フランス、イタリア、韓国、アメリカに旅行をしました。今年の夏には、カンボジア、ベトナム、タイへの旅行も計画しています。アメリカ、ヨーロッパでは、留学中のホストファミリーと再会し、今でも連絡を取り合い、家族のような付き合いをさせていただいています。

大学には、本当に様々な人がいます。育ってきた環境が違う人が集まり、自分とは違う意見を持っている人がたくさんいます。同じ日本人でもこんなにも意見が違うのかと驚くこともあります。けれど、そういう人たちとの出会いを楽しみ、人との交流から新たな発見が得られる喜びを感じています。千葉に来て、本当に多くの出会いがあり、大学三年の今、たくさんの素晴らしい友人がいます。

このように、大学生活における様々な経験や人との絆から、自分の世界観がどんどん広くなっていくのを日々実感しています。今の自分、今の大学生活は、高校時代の留学経験無くしては、語れません。それ程までに、留学という経験は本当に大きな影響を与えてくれました。

最期に、このような素晴らしい機会を与えてくださった皆様に、心から感謝の気持を伝えたいです。ありがとうございました。

恩師　追悼

加藤直衛先生を悼む

梅村　薫（12回生）

直衛先生と私との出会いは、昭和三十三年、胸ふくらませて入学した中津高校一年生の教室でした。私達1Dの担任となられた直衛先生は、私達とちょうど十歳違いの若々しい独身の教師でした。その直衛先生がある日突然に、毎朝のホームルームで文藝春秋に掲載中の作家広津和郎氏の「松川事件について」を読み始められました。高校一年生の私達にとってその文章は難しく、「松川事件」も知らず、だんだんに私語をしあう生徒が増えていきました。それでも先生は、直向に読み続けられました。私の中には情熱を込めて読み続けられる先生の姿と「松川事件」という言葉が残りました。

後年私は、一九六三年九月に最高裁で全員無罪が確定した「松川事件」が、米占領軍と時の日本政府による戦後最大の謀略事件であったことを知り、広津和郎氏の論文が自らの作家生命を投げ打って「松川事件」の真相解明に打ち込み、その謀略性を明らかにした有名な連載論文であったことを知り、直衛先生はそのことを子供たちに伝えたかったのだと分かりました。いつの日にか子供たちの心に自分の志が芽生えることを信じて諦めずひるまず語り続けることこそ真の教育であり真の教師であると、松下村塾の吉田松陰を思い出しながら、あらためて畏敬の念を感じます。私は、先生を悼みながら拙い歌を詠みました。

「松川の真実子らに伝えんと文春読みし教師忘れず」

先生は身罷られるまで、揺ぎない一筋の信念を貫かれ、決して奢ることなく清貧なる人生を送られました。

殊に短歌は「花の木短歌会」に所属され、熱心に作歌活動に励まれておられましたが、身罷られる二週間ほど前に自宅へお見舞いに伺ったとき、月例会提出用の短歌を推敲してみえました。

「八ケ月耐えたる痺れ集め来て左手小指より恵那の峯に放つ」

これが直衛先生の最後の歌になりました。先生は肺癌の末期でベッドに寝たきりの生活でしたが、この歌にはこんな病に決して負けないという直衛先生の気迫が満ち溢れています。

身罷られる一週間ほど前にお邪魔したとき、わたしの拙い書で「慈愛溢眼義満懇」と書いて先生に差し上げました。先生は既に瞑れなくなっていましたが、にっこりと微笑んでくださいました。

心から哀悼の誠を捧げます。安らかにお眠りください。そして、教え子たちをいつまでも見守っていて下さい。

佐尾實先生を偲んで

井口　昌行（21回生）

お盆も明けた八月二十一日、バスケ部の恩師である佐尾先生が逝去された。

数年前に肝臓を患いそれ以降は好きなお酒をほとんど飲まれず節制されていた。私達の年代のバスケ部は高校時代から仲が良く、卒業以来、正月には男女合わせて十数名が集まり、先生を交えて酒を酌み交わしていた。

ここ数年は、先輩、後輩を含めたバスケOB会を先輩である恵那の「きじや」さんで開催しており、先生はにこやかに皆の話を聞いていることが多かったが、練習中の苦労話などをしていると時として熱く昔話をされることもあった。

当時のバスケの練習は学校南側にあったかまぼこ屋根の講堂兼体育館で行っていた。先生は東側の舞台に寝転び竹刀を片手にじっと見守り的確な指導を頂いたお陰で県大会新入戦で優勝することも出来た。これからはあの朴訥温顔に接することが出来ないと思うと残念でならない。

藤澤重兵先生を偲んで

桂川　邦俊（31回生）

「ありがとうございます」この言葉を何度言っても足りません。

恩師であり恩人であり、私が今こうしていられるのも先生のお陰です。先生と出会わなかったら、今の私の人生はありませんでした。進学から就職そして結婚式の仲人まで、人生の節目々には、必ず先生に相談をしてきました。どれだけ先生にお世話になったことか、語りきれません。

先生との出会いは、中津高校へ入学してすぐでした。当時中津高校にはスケート部があり、私は先輩の強引な勧誘で入部してしまいました。その時の監督が藤澤先生でした。一年生の夏休みには、先生が「夏休みの間は俺の家に滞留しろ！」と言われ、夏休み中先生の家で寝食を共にさせていただきました。理由は「中津にいるとお前は駄目になる！」との事。何故駄目になるかは皆さんの想像にお任せしますが、先生の眼には、かなりの不良に見えたのでしょう。でもこんなふうにしていただけるなんて一番喜んだのは、私の両親でした。

また先生は日本体育大学空手部出身でしたので三年間の高校生活では、常に厳しい鉄拳を数々頂きました。しかしその鉄拳は、私達を無上の愛で可愛がり、そして心配してくれていた鉄拳でした。スケートでは、県大会優勝、インターハイ・インカレ・国体と出場できたのも先生の指導があってのことでした。

そして大学進学、就職、結婚、今では会社経営まで出来るようになったのも、先生がいつも温かいアドバイスと叱咤激励をしてくださったお陰です。先生は、「人間はどれだけ自分に厳しく出来るかで決まる。常に精進し、心を高めなさい。そして人と人の出会いを大切にしなさい。」とおっしゃっていました。当時はそんな意味も解らず、気にもせず、自由奔放にしていましたが、社会に出て、この言葉の大切さが分りこの言葉を常に意識してきました。これからもそうして生きていきたいと思います。

それでは最後に紹介させて頂きます。高校卒業の時に、先生の直筆で、素敵な額に入れて頂いた言葉があります。我が家の大切な家宝です。

礼儀作法。
智・勇・術の調和。
端正な姿勢、温和な態度。
命限りの道である。
自己を厳しくし己を知れ。
人を憎まず慢心せず、
常に内面的修養に努めよ。

須田秀麿先生の思い出

渡邊　卓哉（32回生）

須田先生に初めて出会ったのは、私が中津高校三年になった四月のことでした。先生の第一印象はとても優しい「おじいちゃん先生」という感じでした。実際接していく中でもその通り、とても包容力があり常に優しく私たちを見守ってくれる、落ち着いたタイプの先生でした。また、それぞれ誕生日の日にはボールペンを朝のSHRで誕生祝いとして頂いた事も覚えています。

三者懇談での思い出は、進路決定のとき私が体育系大学への進学を希望したところ、懇談会の席で「蛍雪時代」を取り出し「君の行きたい大学はどこだね」と聞かれました。大学名をいうと「そうか」といいながら、真剣に受験科目などを調べてくださったことを思い出します。普通なら「受験科目くらい自分でしっかり調べておかなければダメ」といわれてしまうところ、英語の先生にも関わらず体育系大学について、自分が受験するかのごとく調べてくださったことを思い出します。その生徒の身にたった優しい姿勢がとても安心感を与え、進路で悩み苦しむ心を癒して頂いたような気がします。

進路決定で悩んでいるとき、先生がよく私たちにむかって言ってくださった言葉が「人生七〇年もあるんだから、この一時の悩みなんて、たいしたことないぞ」といって心を和ませ、安心させてくださったことが、進路で悩んでいる私たちにとって、どれだけ安心し冷静に落ち着いて進路決定できたことか。

また、クラス目標を決めるときは「これでいく」と言って「四十四人は一人のために　一人は四十四人のために　そして、そろって成長しよう」に決定されました。「一人のクラスメートが苦しんでいたり、困っていたら声を掛け、個人はクラスの一員として自覚を持って行動しよう・・・」というようなことを言っておられたような気がします。一年間で須田先生が勝手に決めてしまったのは、このクラス目標だけでした。あとは私たちのやりたいように生徒の自主性を重んじ、そして尊重し常に陰から見守っていただきました。そのお陰みんな立派に育っています。

今、須田先生と同じ職業に就いている私ですが、なかなか先生のように生徒の自主性に任せ、生徒を信じ、生徒自ら動き出すのを待つことができませんが、年をとる毎に少しでも先生の指導に近づけるよう努力していきたいと思います。

鷹見幸彦先生を偲んで

大蔵　隆夫（22回生）

鷹見幸彦先生の訃報に接し、私は教壇の端に少し身をもたせ掛けながら、紳士然とした或る種格調をもって英語のリーダー片手に授業をされていた先生の姿が懐かしく思い出されます。

私にとって先生は、高校三年時の担任であり、又、英会話クラブでは三年間、顧問として御指導を仰ぎました。

先生はいつも背広に糊のきいたワイシャツ、ネクタイという出で立ちで、生徒に対しても常に礼儀正しく、決して感情的になったりせず、生徒の個性を大切にされる方でした。

毎年文化祭が近づくと恒例になっている英語劇の練習に入りますが、そんな時、あの物静かな先生と同じ人かと見間違うくらい演技指導に熱が入り、「Kimo kuni zaka」の一場面 "We are tired. Why don't we have a rest?" というくだりでは、いかにも疲れ果て床に崩れ落ちるようなお手本を示され、演技の全くの素人の私たちに、しかも英語での感情表現を根気強く指導していただいたことなど、数々の思い出が蘇えってきます。

一〇〇周年の同窓会に出席した折り、先生も出席されていて、「先生、僕を覚えてらっしゃいますか」と声をおかけしたところ、「君を忘れるはずないじゃないか」と言って下さいました。大方四十年の歳月の流れを思い、先生の安らかなご冥福を心よりお祈りいたします。

May his spirit rest in peace.

恩師訃報

■長島光夫先生　司書
平成十八年八月十八日逝去 七十五歳
定昭和三十二年在職

■須田秀麿先生　英語
平成二十年二月十七日逝去 七十九歳
昭和五十年～昭和五十五年在職

■長瀬峯秀先生　理科
平成二十年七月十日逝去 八十三歳
昭和二十三年～昭和三十一年在職

■伊藤郁雄先生　校長
平成二十年八月三十日逝去
七十七歳　平成二年～平成三年在職

■藤澤重兵先生　体育
平成二十二年二月二十八日逝去
六十七歳
昭和四十八年～昭和五十七年在職

■横家　顯さん　事務
平成二十二年二月二十日逝去
七十六歳　平成五年在職

■加藤直衛先生　英語
平成二十年七月十九日逝去 七十六歳
全昭和三十年～昭和三十五年在職
定昭和四十二年～昭和五十年在職
定昭和六十三年～平成五年在職

■佐尾　實先生　体育
平成二十一年八月二十二日逝去
六十八歳
定昭和三十九年～昭和四十一年在職
全昭和四十一年～昭和四十三年
定平成十年～平成十三年在職

■鷹見幸彦先生　英語
平成二十二年八月九日逝去 七十七歳
全昭和三十九年～昭和五十二年在職
定昭和五十三年～昭和五十五年在職

※教職員の訃報につきましては、情報が不十分で、失礼もあるかと思います。もし、気付かれた方はご一報ください。

平成二十年度 中津高校同窓会総会開催

●とき　平成二十一年五月九日(第二土曜日)午後三時半
●ところ　料理旅館「勝宗」

平成二十一年度中津高等学校同窓会総会を開催いたしました。今年度は、昨年度より建設中の第二校舎が四月に完成し、新生中津高校がその永い歴史に新たな年輪を刻む年となりました。恵那北高校との統合による単位制高校として新たなスタートを切ってから、生徒達も新校舎で大変落ち着いて学習に励んでいます。

創立一〇〇周年記念事業の一環の「第一期旭陵留学制度」も合計三〇名の生徒を海外に送り出して終了し、続いて、創立一一〇周年の年まで毎年二名を派遣する「第二期旭陵留学制度」が新たにスタートすること、新同窓会名簿を平成二十三年秋に発行すること、平成二十二年度末に完成予定の第三棟校舎への設備援助等を総会で取り決めました。

懇親会で挨拶される野村校長

恒例の校歌斉唱

中津高校定時制六十周年記念式典

平成二十一年度 同窓会総会を開く

中津高校定時制は、昭和二十三(一九四八)年六月二十日、旧中津商業高等学校に定時制商業科として開校して以来、平成二十年で六十周年を迎えた。これを記念し新第二校舎の完成に合わせ、平成二十一年四月十八日十五時三十分から六十周年記念式典が、来賓・同窓生・現旧職員ら三十余名の参加で行われた。場所は定時制生徒の念願であった新校舎内の給食室である。

式典の司会は西尾晃司副会長(定22回生)、開会の言葉は可知幸夫副会長(定15回生)、佐藤和男会長(定15回生)のあいさつの後、記念品贈呈、野村一高校長先生へ目録が手渡された。記念品は給食設備一式(食洗機・消毒保管庫・冷蔵庫・パンラック・トレー)、パソコン一台である。

その後、野村校長先生のあいさつ、横井晃中津高校同窓会副会長(全25回生)の祝辞と続き、全員で校歌斉唱、指揮は旧職員の梅村薫先生(全12回生)、閉会の言葉を司会者が述べ、記念写真を撮影した。参加者には記念品のボールペンが渡された。

引き続いて平成二十一年度定時制同窓会総会が開かれた。例年は七月の第二日曜日開催と決まっていたが、今年は六十周年記念式典との同日開催となった。

今回の総会では、会計監査の交代があり、伊藤孝男さん(定商7回生)、林勇さん(定普7回生)の二名が退任され、安藤代年子さん(定14回生)、張山ちほ子さん(定17回生)が就任された。

今年度の事業計画は、例年の本校・分校交流会と総会に、授業参観が新たに加えられた。

総会後の懇親会は、野村校長先生を始め先生方を迎え、「木曽路」において三十一名が参加、六十年の歴史を振り返り、新たな歴史を作る夢のある話などで盛り上がった。

なお、平成二十二年度の総会は七月十日(土)午前十一時を予定しています。場所は星ヶ見荘です。同窓生の皆さんが声を掛け合って多数ご参加くださいますように、お待ちしております。

佐藤　和男(定15回生)

佐藤会長から野村校長へ目録贈呈

60周年記念式典

今回は、十九回及び二十九回生の皆さんに合同で幹事を勤めていただきました。総会後の懇親会には四十九名の方が参加しました。参加者は、旧交を深め大変盛り上がりました。

宮下　晴夫(20回生)

旭陵ゴルフ会盛大に開催される

恒例となった、第十六回を数える旭陵ゴルフ会が、九月二十三日(祝)、ユーグリーン中津川ゴルフクラブで開催された。

爽やかな秋空の下、県内外から一四〇名が集い、楽しく、そして白熱したプレーが展開された。午後四時過ぎから始まった表彰式・パーティでは、還暦者が司会という決まりのもと、十九回生の井戸俊作さんが担当され、実行委員長の田口清男さんの開会のことばからはじまり、旭陵ゴルフ会会長の吉川英輝さん、同窓会長の三尾義彦さん、現校長の野村一高さん、中津川市長の大山耕一さんからご挨拶をいただき、名誉会長であり、プレーもされた大先輩、一回生の伊藤成章さんの乾杯で宴が始まった。

そして、成績発表は、二十四回生の加藤良一さんが担当され、順位の発表のたびに、会場からは大きな歓声が上った。

ダブルペリア方式で行われた今大会の優勝者は、二十四回生の稲熊正治さん。そして、ベスグロは十九回生の吉村敏博さんが獲得した。

会もいよいよクライマックスを迎え、十三回生の勝野正彦さんの指揮で校歌を斉唱。

そして五回生の田口正男さんの閉会のことばでお開きとなった。

私たち三十九回生は、今回十四名で参加した。いつものことながら気を遣わないゴルフほど楽しいものはない。ぜひこの楽しさを他の年代、特に若い年代の方にもわかっていただき、今後さらに多くの同窓生で、この旭陵ゴルフ会が行われることを願うものです。

今井　裕司(39回生)

旭陵ゴルフ会吉川英輝会長(11回生)挨拶　優勝は稲熊正治さん(24回生)　乾杯は伊藤成章名誉会長(1回生)

表彰式・パーティ

田口正男さん(5回生)閉会の言葉

三尾同窓会会長(12回生)挨拶

関東OB会だより

関東OB会会長　石黒　広洲（13回生）

昨年十一月七日（土）、飯田橋グランドパレスホテルにて年一度の総会兼懇親会が盛大に開かれました。特1から27回生まで約一二〇名の方々の参加を得て、旧交を温めながらふるさと談義に花を咲かせました。校長先生・同窓会副会長はじめ関係者の方々に近況をご紹介頂いたあと、中津の名産品をかけた出身地域対抗ゲームを楽しみ、締めくくりに懐かしい校歌を斉唱し、母校そして中津川の更なる発展を願ったひとときでもありました。

各回生の世話人を中心に運営されているOB会ですが、今回の幹事25～27回生以降のOB参加が増えないことへの対応が課題です。

四〇代から五〇代前半の方々が、昔より多忙になっている昨今の情勢から、二十二年度の幹事を13・14回生にまで戻して二度目を担当頂くことで、時間を稼ぎながら状況改善を目指します。幹事役を支援するため、更に年次を遡って7～12回生を中心にした事務局機能も立ち上げ、順次年次を若くしながら円滑な運営に努力して行くことになりました。

同窓会の目的は、卒業生が母校と現役の生徒を支援することに加え、会員間の親睦を図り、同じ学び舎で学んだ仲間が助け合う機会を作り出すことではないでしょうか。特に28回生以降の方々には、まずは誘い合って顔を出して頂けたら幸いです。

関東OB会　総会・懇親会

"高鳴るや黎明の鐘"　校歌斉唱

総会・懇親会　飯田橋グランドホテルにて

特別寄稿　バレー部○栄光の記録

昭和二十六年、岐阜県立中津高等学校に入学、バレー部に入部した。監督は奥田陸郎先生、部員は三年に芹沢、原、大澤ほか二年郷原、伊藤、井上など先輩がいた。三年生は大学入試の準備で部活の練習はおもに二年一年で行っていた。私が二年生になった時は三年生の普通科生は数人で商業科、工業科生がチームメンバーを構成していた。当時バレー部は九人制屋外コート。春の県大会会場は岐阜市の戦時中軍隊の兵舎跡地に出来たコートであったと思う。優勝戦は岐阜高校と戦ったよう な記憶がある。そして勝った。制覇の感激、駆けつけてくれた先輩たちも喜んでくれた。中津高校に県大会の栄光の優勝旗をもたらした最初がバレー部。一九五一（昭和二十七）年春の高校全国選手権大会、インターハイは神奈川県藤沢のコートで東京の都立第三高校（商業高校？）に初戦で敗北。都市のレベルの高さを思い知らされた。宿は江ノ島海岸の近くの洗心亭。試合に負け片瀬の海で泳いだのも懐かしい。

そして迎えた秋の県大会堂々の優勝。国体の代表に選ばれた。当時はまだ国内は復興途上。現在の国体とは比べ物にならない。昭和二十七年第七回国民体育大会は東北地方秋田、山形、岩手の三県で分担して開催された。中津川駅前で記念写真、奥田先生は転勤され替わって鈴木茂男先生と選手のみで、管井・酒井先生、ブラスバンドだけでの見送りの出発。夜岐阜駅に集合、夜汽車で出発東北の駅に着いたとき駅弁売りが、「おすすすんふん」と呼んでいた。初めて聞いた東北弁「お寿司に新聞」だった。

山形に着いたのは二十四時間後の夜八時、上の山の近衛屋旅館が宿舎、当時は米を中津川から旅館に送らなければ泊めてもらえなかった。

高校バレーの試合は山形の会場で行われた。場所失念。「だんすはまえ（男子は前）、じょすはうすろ（女子は後）」またしても東北弁。開会式はスピーカから流れる天皇陛下のお言葉を聞いた。初戦は栃木県代表宇都宮高校と、第二戦は熊本県代表熊本工業高校に勝利。第三回戦は秋田県代表舘鳳鳴高校に惨敗した、もし勝っていればベスト八になるところ残念だった。これが中津高等学校バレー部の昭和二十七年唯一の栄光の記録である。

この時のメンバーはほとんど実業科生ではあったが、中津高校の校歌で入学しこの校歌に送られて卒業した間違いなく旭丘の総合制高校中津高等学校卒業生である。しかし一九五六年商業科が商業高校として独立し普通科だけのいわば進学校になると過去の歴史は忘れ去られてしまった。

なぜ今頃こんなことを持ち出したのか、昭和五十二年発行の旭陵七十年の記念誌、平成十八年発行、旭陵一〇〇年記念誌にもこの記録が皆無である。当時は総合高校、一年生の時は農業・工業・商業・家庭・普通すべての生徒が同一ホームルームであった。三年間を旭丘で過ごし、そこにしか思い出のない学生時代なのだ。

共に闘った、今は亡き藤井謙一郎（藤原）（商4回生）、矢野利文先輩（商4回生）のご冥福を祈る。

藤井　守人（5回生）

インターハイ予選優勝

定時制本校・分校交流会　盛大に十回目開催

平成二十二年十二月十四日（土）

十回目を数える恒例の定時制本校・分校交流会が、本校を幹事校とし、さる十一月十四日（土）十一時から、本校十三名、分校八名、定時制現旧職員五名、計二十六名の参加を得て市内駒場の「星ケ見荘」で開かれた。昨年は東本分校を幹事校とし、十一月三十日（日）苗木「しろやま」で二十八名が参加して開かれ、幹事校の本校へのバトンタッチがされた。

交流会は、佐藤和男同窓会長、安藤敏彦副校長の挨拶の後、玄関前で記念写真を撮り、乾杯の音頭は大先輩小川勇さん（定商4回生）で宴に入り、出席者全員が近況を含めた自己紹介をした。今年は女性の参加が五名となり華やいだ雰囲気となったこと、可知幸夫副会長（定15回生）から正しいウォーキングについて講義があったこと、福岡の深谷政廣さん（福定5回生）が積極的にリハビリしてみえること、和田前会長（定商6回生）のユーモアたっぷりの夢の話など、健康やなつかしい話題が次つぎに出され、交流と親睦を深めた。

次回は加子母分校が幹事校で平成二十二年秋開催されることを確認した。年に一度の交流会へ、同窓生の皆さん、是非気楽に参加してください。

佐藤和男（定15回生）

藤井博氏（02回生）第6回芦原義信賞を受賞

モダンアート「モノ派」の先鋭的芸術家として、物の本質的存在を「みること」にこだわって芸術活動を続けてきた藤井博氏が、第六回芦原義信賞に選ばれた。この賞は著名な建築家芦原義信氏が、武蔵野美術大学卒業生の中で、芸術分野に多大な影響を与える創造的活動をしている新進芸術家に授与する権威ある賞である。三年前に出版された『藤井博作品集』や『芸術手帖』に載った『藤井博論』もの・言葉・時間」（石村実著）が芸術界で注目を集めた結果である。「この賞は私にとって大変なものと喜んでおります。登竜門です。」との本人の感想が寄せられている。詳しくは『藤井博ホームページ』をどうぞ。

梅村　重（12回生）

同窓会

●平成二十二年度
中津高校同窓会総会
■五月八日（土）午後三時～
幹事　30回生
勝　宗　20回生
多数のご参加をお願い致します。

中津高校定時制同窓会総会
★平成二十二（二〇一〇）年七月十日（土）午後十二時～
星ケ見荘
同窓生の皆様のご参加をお待ちしております。

定時制四分校・本校交流親睦会
★平成二十二年度は秋・開催予定
多数のご参加をお待ちしております。

旭陵ゴルフコンペ
平成二十二年九月二十三日（木）
ユーグリーン
連絡先　中津川市苗木川六八八一五四
ユーグリーンゴルフ倶楽部内（事務局）
TEL　〇五七三―六八―六一一一
FAX　〇五七三―六八―六一一九

平成二十二年度
関西旭陵会
七月四日（日）十二時～
大阪ガーデンパレス（大阪市淀川区）
TEL(06)6396-2211

平成二十二年度
関東OB会
十一月十三日（土）十二時半～
飯田橋グランドパレス（東京都）
TEL(03)3264-1111

第10回地区総会
名古屋地区会
平成二十二年十月九日（土）十三時半～
ルプラ王山（千種区覚王山）
TEL(052)762-3151

名古屋支部だより

名古屋地区同窓会にお誘い

名古屋地区会副会長　古井　良平（商7回生）

当地区は隔年ごとに開催しておりますが、今回は第九回を迎え、発足から十八年が過ぎて、益々盛況を極めております。

今回は総会・親睦会を、平成二十年九月二十七日（土）に「ルブラ王山」（名古屋市千種区覚王山通り）で開催いたしました。

案内する卒業生対象は、全日制の三十回生（昭和四十三年卒業生）迄として、今回も範囲は愛知県内・岐阜・三重県など隣接地域の居住者と、今までの出席者に限定させていただき、年次別幹事さんの同級生名簿をも参考に、総数千六百通の案内状を発送することが出来ました。

名古屋地区会は、発足当初から単なる懇親会で終始するのではない懇親会と致したく、校歌の四節に歌われている「新たな世の柱となり、母校の名を顕わさん」を実践して社会に貢献された方々に、名古屋同窓会総会にてお話をお伺いいたしたく、先回に引き続き第九回も、卒業生による記念講演の依頼者・講演内容等の検討を幹事会で討論、協議し、候補者は数名上がりました。今回は特に今世紀に避けて通れない問題に対処すべき難題である高齢者問題、この看護医療学界に第一人者として活躍されて見える三河内憲子様（12回生・旧姓渡辺）に、幸いにも講師をお願いすることが出来ました。

演題として「自分の健康を知って、はつらつ人生…そして看護」を一時間二十分間、出席者に分かり易く講演をしていただきました。

誰しも迫りくる老後に日本の看護医療教育と急速に進む高齢者医療制度の改革に対処した看護ケアー等の諸問題点の講演内容は、私たち誰しも身近に迫り来る事ですから、皆様は真剣に聴講されてお見えでした。

先生は苗木出身で、名古屋大学医学部付属看護学校を卒業、看護婦として勤務しながら日本福祉大学社会福祉学部（11）を卒業、名古屋大学医学部教授・医学博士となり、現在は名古屋大学医学部名誉教授・日本赤十字豊田看護大学教授・日本看護医療学会理事長の要職でご活躍、専門的著書も多数出版されておられます。

当日は役員・年次幹事の皆さんは、出席者数を杞憂していましたが、講演一時間前から次々とご来場され、今回も出席者は二百名を越す大盛況となりました。

ロビーは大混雑、講演会場の椅子も一八〇席用意しましたが、数十名が立ち席となってしまいました。

来賓として、同窓会会長三尾義彦様、中津高等学校校長加藤佳道様・中津川市市長大山耕一様、恩師は愛媛から神田篤子（旧姓高木）先生、可知宗三先生、浅井紘美（旧姓伊藤）先生に蘇水会（中津商業同窓会）内木名古屋支部長、恵那高校同窓会吉田名古屋事務局長様、もちろん本校の同窓会役員数名もお越しいただけました。

今回も名古屋地区会の出席者には、遠くは東京・横浜・安曇野・静岡・大阪から、また三河内先生の応援団として、十二回生の中津川市在住者・故郷苗木地区などから多数駆けつけていただきました。

また更に大先輩の中津高等女学校卒業生（高女39回生）も矍鑠としたお二人が出席されました事は、伝統ある高等学校としての友愛と団結、母校の誇りを再認識させられた同窓会となりました。

講演会後は次の間の大宴会場にて、年次別テーブルに着席してから、式次第により総会を進行、井坂名古屋地区会会長（7回生）の挨拶、同窓会長、本校校長先生、市長さん、復活した硬式野球部の紹介と募金のお願いなど、多種多彩な挨拶後には、副会長猪飼美喜子さん（5回生）の指揮、鈴木栄子さん（22回生）のピアノ伴奏によりレジメの歌詞を見ながら校歌を四節まで、卒業以来初めての方？全員気持ちは高校生時代に戻り、あの「旭が丘」から中津の街を見た光景を思い起こし、テンポ良い校歌を斉唱しました。

名古屋地区会　校歌斉唱

そして懇親会に移行、乾杯は久納正博様（1回生）の音頭で、再会の喜びと、出席者全員の健康・更なる母校の発展を祝して、杯を高らかに上げて発声、喜びあいました。

中央のテーブルにはルブラ総料理長自慢の和洋料理に、寿司・しゃぶしゃぶ・屋台には「そば」と年齢を考慮した献立に、各自は好きな料理に堪能し、久しぶりの同窓生、クラブの先輩、昔は近所の「竹馬の友」など東濃弁での会話が弾み、予定時間は瞬く間に過ぎて行きました。

三河内憲子先生の講演

宴も後半になったところで、正面中央に掲げた大看板（第九回中津高等学校名古屋地区会）をバックに一回生からの記念撮影、カメラマンはセミプロの加藤崇機さん（10回生）の助言で、社会の荒波を乗り越えた自負の顔から、童心の顔に変身して、パチリと喜色満面の同級生軍団の舞台役者が次々と変わり延々と三十回生まで続きました。

予定時間を三十分も過ぎて、午後七時三十分、数十年前の学生時代に過ごした山紫水明の地、中津川地方を思い、懐かしみながら唱歌「故郷」を元気よく歌い、そして二年後の再会を誓いながら、ある年次は二次会、友達同士でお茶に、帰宅組と、ネオンと秋の長い夜を過ごすべく名古屋の街と路地に散会していきました。

関西旭陵会

関西旭陵会活動報告

関西旭陵会会長　加藤　紘（10回生）

関西旭陵会では平成二十年度行事として、平成二十年七月六日に、新大阪ガーデンパレスにおいて例会を開催しました。当日は会員五十名と、本部から三尾会長と吉村副会長、本校からは加藤校長先生と宮下先生のご出席を頂きました。今回は総会懇親会の他、新たに講演会も加え、初回は六回生松下正三さんによる「知って得する『繊維の知識』」でした。身近でありながら知らないでいた繊維の深く広い世界を、ご造詣深い演者のお話で、興味深く伺うことができました。懇親会では恒例の中津川名産の抽選会や九回生のコーラスなど時間も一杯で、特に二十九回生小川里子さんの名司会もあって、大変楽しく盛大な会となりました。

また平成二十一年度行事としては、平成二十一年十一月二十二日に「石山寺歴史散策」を開催しました。当日はJR石山駅に集合し、門前のレストランで名物料理での会食の後、紅葉も見ごろの歴史の地を、名ガイドによる楽しい紹介を聴きながら、ゆったり気分で見て回ることができ、改めてこの地のすばらしさを味わうことができました。かつて藤村が滞在したというゆかりの密蔵院も、今回特別にその庭に入って見せてもらうことができ、当時詠まれた詩が文学碑として設けられていることなど、参加者の多くは初めて知りましたが、地元の偉人の足跡を意外なところで再確認した観がありました。今回の参加者は二十一名で、内三名は中津川から参加を頂き、会を盛り上げて下さいました。

これらの会の企画実施に関わって下さいました皆様、ご参加下さいました皆様に感謝するとともに、関係の皆様方に支部活動への引き続いてのご理解と協力を期待するものです。

関西旭陵会　新大阪ガーデンパレス

石山寺歴史散策→

日下部先生退職記念

演劇部同窓会開催される

平成二十二年三月二十日　ちとり村にて

中津高校演劇部卒業生の同窓会を開催しました。恩師の日下部先生（18回生）が退職されるのを機に、日下部先生が顧問を務められた二十一年間の卒業生と顧問の先生方、合わせて一〇五名がちとり村に集まりました。二十一年間の卒業生ということで、下はこの三月に卒業したばかりの部員まで二十一年間全ての学年からさまざまな年代が参加しました。久しぶりに再会する人も多く、できるだけ多くの人と話せるように、立食形式の会でしたが、あちこちで楽しそうに思い出話や近況報告をする姿がみられました。それぞれ過ごした時は違いますが、同じ演劇部で三年間部活に打ち込んだ仲間として楽しい時間を過ごしました。まだまだ話す時間が足りず、ぜひまたこのような機会を持ちたいと思いました。

熊谷　志保（53回生）

日下部光穂先生を中心に集まった演劇部同窓会

第9回卒業D・E・F組　古希記念同窓会

「古希」を記念して、中津高校見学後、ホテル木曽路で一泊同窓会を行う。三年に一回だったのが最近は一年おきの開催になっています。

國部　勲（9回生）

第7回卒　普通科同窓会開催

平成二十一年五月十三日、十四日の二日間にわたり、中津高校第七回（昭和三十一年卒）普通科三クラスの一泊同窓会を、信州昼神温泉の旅館「古鼎」で開催しました。

遠くは埼玉県、川崎市、神戸市などの遠方からの出席者を含め、二十九名の参加で大いに盛り上がりました。参加者からは「一泊とはいえ、もっと時間があれば……」とか「必ず一年ごとに開いて欲しい」などの声が寄せられました。来年三月に次回を計画することになり、再会を約して散会しました。

渡邊　梓（7回生）

第12回生　浅間温泉忘年会

十二回生普通科は、中津川、名古屋、関東に支部を作り「おんし会」と名乗っているが、今回三支部合同の浅間温泉忘年会を行った。

十月に平湯温泉紅葉ツアーを計画し台風の襲来で中止したリベンジ版。総勢二十三名が参加し、ウクレレやハーモニカやテノールの独唱も加わって大いに盛り上がり、夜中の二時過ぎまで宴会が続いた。おんし会は毎年数回の集まりをもっているが、今回は家庭科の同級生も参加して、広がりが出てきたのはうれしい限り。

梅村　薫（12回生）

第18回生同窓会

第十八回生は、二十年八月十六日に「還暦を祝す同窓会」と称して、同窓会を開催しました。六十名弱の参加者を得、楽しい歓談の一時を過ごしました。参加できない人からは、「六十にもなれば、家の法事もあるのよ。」といわれ、開催時期がますかったかなと幹事一同反省しました。

岩田　秀二（18回生）

中津高校25回生同窓会

・日時　平成二十一年五月二日土曜日六時から
・会場　パンプー（マジョリカ）
・参加申し込み　八十六名
・当日の参加者　七十六名（およそ八十名）
・今後の予定　五十七歳のとき
　六十歳のとき

高橋　孝助（25回生）

四十年ぶりに　Gクラス（16回生）
盛り上がる乙女達

平成二十一年六月二十五日、恵那市にある民宿「藤太郎」にて四十年ぶりのクラス会を開催しました。民宿「藤太郎」のおかみさんこと畠中美千代さんの声掛けによって開かれました。畠中さんはクラスの友人と毎年会ってはいたそうですが、「今年はクラスの皆に声を掛けてみましょう」となり、電話作戦開始一ヵ月余りで開催する運びとなりました。

Gクラスの皆さんは現在〇〇才ですが、高校時代の話になると、あの頃の乙女に戻ったようで「藤太郎」さんの宴会場は、大変賑やかだったそうです。

高田貴志子（16回生）

編集後記

チェンジ

中津高校の校舎も変わります。西側の工事用シートが外され、新校舎がお目見えしました。（すべての完成は、二十三年春予定）「旭陵」の送付形式もA4版にチェンジしました。これにより送付の際に生徒さんの手を煩わす事がなくなりました。また編集委員には、新メンバーが五名加わり、新コーナーも出来るなど内容も新しくなりました。

先輩編集委員が大切にしていらした「中津高校らしさ」、同窓会会員皆様の「母校へ対する思い」を大切に受け継ぎ、「旭陵」が中津高同窓会の大切な交流の場として成り立つ様、編集委員一同邁進して参りたいと思っております。

吉村美津子（24回生）

編集委員です！

注目　ホームページごあんない
同窓会のホームページ
http://kyokuryo.jp/
関東OB会のホームページ
http://www2s.biglobe.ne.jp/~HICUBE/nakatsu/
どうぞ、のぞいてみてください

高橋先生一〇一才のホームコンサート！

二〇〇九年十一月十七日に高橋照子先生宅でいつものメンバーで先生の一〇一歳の誕生日をお祝いしホームコンサートを催しました。このコンサートは先生が落合に見える時からで春日井に居を移られてからも続いていますからもう十五年以上になります。

当日は中津川から後藤、可知、三尾、安福、今井、勝野とお邪魔しピアノ独奏、独唱、全員合唱と大変楽しいひと時を過ごしました。

先生は大変お元気で時にはピアノを弾かれたり、デイサービスでは最年長ながら歌の伴奏をし皆さんと楽しいときを過ごされています。

一〇一歳と思えないほどはつらつとなさっており来春のコンサートを約束しお暇しました。

勝野　正彦（13回生）

・中津高校のことは
http://school.gifu-net.ed.jp/nakatsu-hs/
・同窓会への問い合わせは
Email
kyokuryo@vega.ocn.ne.jp
FAX 0573-65-2721

編集委員
顧問　三尾　義彦（12回生）
　　倉田　順子（14回生）
　　佐藤　和男（定15回生）
委員長　吉村美津子（24回生）
委員　大野　亙（7回生）
　　梅村　薫（12回生）
　　阿部　武東（14回生）
　　藤井　四郎（15回生）
　　吉川　義康（18回生）
　　長尾　浩一（24回生）
　　朝日美智子（25回生）
　　伊藤　広忠（28回生）
　　今井　新司（39回生）
教員　日下部光雄（18回生）
　　宮下　晴夫（20回生）
　　岩本　隆明（22回生）
　　林　尚志（29回生）

発行　平成二十二年三月
岐阜県立中津高等学校同窓会
〒508-0001
中津川市中津川一〇八八の二